

連携のツールとしてのワークサンプル法の活用可能性

○ 仲村 信一郎

(国立職業リハビリテーションセンター)

1. はじめに

トータルパッケージの幕張式ワークサンプル(以下 MWS と略す)が市販され、その有効活用が期待されているが、「連携のツール」としての可能性も考えられている。

調査研究報告書 No.75 の第 4 章第 2 節において、「MWS の活用における連携」等についての考えが述べられているが、ここではワークサンプル法等について、どのように連携のツールとして考えられてきたかに着目し、整理する。

2. ワークサンプル法の本来の活用の仕方

ワークサンプル法は、職業評価における作業評価を行うための一手段である。

もともと、ワークサンプルが開発された理由は、「障害者自身が現実に自己の潜在能力を評価し、自己の限界を判定する能力に乏しい。また、直感的天賦の才能のある評価者あるいはカウンセラーといえども、クライアントの職業的潜在力に関して、当て推量をして評価技術の妥当性を冒したり、障害者の願望におしまくられたりする」からである(ICD,1969)。

このようにワークサンプルは、①採用・適正配置と②訓練について活用されている。トータルパッケージは①②の活用を満たしているが、さらに連携のツールとしての可能性が見出されている。

3. 連携のツールを概観する

ここでは、ワークサンプル法に関らず、連携のツール全般について把握しておきたい。

(1) 連携のツールとして開発されたチェックリスト等

連携のツールとしては、ICF(International Classification of Functioning, Disability and Health: 国際生活機能分類)のチェックリストや、教育支援計画での「支援シート」、「就労移行支援のためのチェックリスト～障

害者の一般就労へ向けた支援円滑に行うための共通のツール～」等の活用が期待されている。

(2) 連携のツールとしても活用されている心理テスト等

① 病院臨床での連携のツールとして使われている心理テスト等

主治医等病院のスタッフと心理カウンセラーでは、ロールシャッハ等の心理テストや、精神障害者社会生活評価尺度(LASMI)や診断に使われる DSM-IV の結果等が内部連携のツールとなっている。一部の心理テストは保険診療得点にもなり、病院経営上の面からも活用しやすくなっている。

② 職業リハビリテーション関連で連携にも活用されている心理テスト等

a. 職業評価及び職業リハビリテーション計画策定に関するテスト等

職業リハビリテーションでは、連携のツールとして使われているものは、障害者用ではないが標準化されている「一般職業適性検査」が身体障害者等に活用され、連携のツールとして使われている。チェックリストでは、全障害に使用できる障害者用就職レディネスチェックリスト(ERCD)が、活用されている。作業評価としてのワークサンプル法では、障害者職業センター方式ワークサンプル法、マイクロタワー法、バルパー法等があるが、市販化がされている MWS(幕張ワークサンプル)が最も連携のツールとして有望である。また、神奈川県総合リハビリテーションセンターと神奈川障害者職業センターにおいて、高次脳機能障害の WAIS の知能検査 IQ プロフィールを情報交換し、連携のツールとして使われている。

b. 重度知的障害者判定での情報交換

地域障害者職業センターは、重度知的障害

者判定を実施するために児童相談所等から IQ 値の情報が必要であり、田中ビネーや WAIS 等知能検査が欠かせない連携のツールとなっている。知的障害者の雇用上の重度判定に用いられる「GATB 器具検査」は、本人の主に手指の器用さを把握するための作業検査として、知的障害者以外の障害者にも連携のツールとして使われている。社会生活能力調査も本人の生活状態把握のみならず、重度知的障害者判定に必要であり、職業安定所への情報提供のために使用されている。

4. ワークサンプル法の連携ツールとしての活用の可能性

ワークサンプルの連携ツールとしての活用の可能性としては、大まかに次の 2 つのパターンが考えられる。

① **パターン**；双方の機関がツールを利用することが出来る状況であり、ツールのデータ等の情報交換がなされる場合である。例えば、地域障害者職業センターと養護学校高等部でトータルパッケージを使用したりする場合である。勿論、これにはツールが、開発した機関以外にも入手可能な状態（市販化等）にあることが求められる。

② **パターン**；片方の機関はツールを利用することが出来る状況であるが、片方はツールを所持して実施することはなく、情報提供として受けとる場合である。例えば、地域障害者職業センターがハローワークに障害者の器具検査 MNOP やボールペン組立、ワークサンプル等の結果を職業評価の一貫として伝えたりする場合である。

情報の共有において不可欠なことは、データ等の情報の意味がわかることである。ワークサンプル法は実際の作業場面に近い内容のため、作業の平均値等だけでも意味は伝わるであろう。但し、それが実際の就職や職場定着においてどの程度役立つ作業量なのかまで、情報として伝える必要がある。

上記②パターンであれば、トータルパッケ

ージ等の機材を持っていない支援機関へ情報提供にも役立つことになる。したがって、片方の支援機関がトータルパッケージを持っていなくてもトータルパッケージを利用した有効な連携は可能である。

ただし、連携のツールとしては、市販化等されて共有化できるものであり、関係機関等に周知されており、標準化されており、他の適性検査等の関連も明らかになっており、さらには就職率や定着率までも出ているようなツールが望ましい。

5. まとめ

トータルパッケージは、十分なサンプル数のデータで標準化されており、作業課題も現在の産業構造に則して新しい。そのため、より一層周知されることにより連携のツールとしての役割を果たすことができるであろう。なお、市販化されているので、職業評価・訓練を行う必要のある機関が共有化することで、連携のツールとしての価値は高まるであろう。

「ワークサンプル法」の文献、「連携」の文献それぞれ豊富にあるが、ワークサンプル法を連携のツールにすることを主題にしているという文献は、MWS 以外に、殆ど見当たらなかった。言い換えれば、ユニークな発想で複数の機関が使用しているワークサンプル法とも言える。

6. 参考文献

ICD：岩崎貞徳訳，小池文英監修：「第 1 部第 1 章時代の新しい課題」タワー法－能力評価の指標－，pp3-11(1969)

障害者職業総合センター：調査報告書 No75, 障害者職業総合センター(2007)

〒359-0042 所沢市並木 4-2

国立職業リハビリテーションセンター

職業指導部 職業指導課

上席障害者職業カウンセラー 仲村 信一郎

Tel：043-297-9083

E-mail：Nakamura.Shinichirou@jeed.or.jp